継時的比較に及ぼす達成目標の影響

○徳岡 大・前田健一

(広島大学大学院教育学研究科)

キーワード：達成目標，継時的比較，有能さの定義次元

The effect of achievement goals on temporal comparison

Masaru TOKUOKA and Kenichi MAEDA

(Graduate School of Education, Hiroshima Univ.)

Key Words: achievement goal, temporal comparison, dimension of competence definition

目 的

達成目標理論において目標間の主要な差異の1つに、有能さの定義次元において用いられる参照基準の違いが挙げられる(Elliot & McGregor, 2001)。習得目標における有能さの定義は、絶対的な、もしくは個人内の基準を用いること、すなわち、過去の自分の成績を参照すること(継時的比較)によって定義されると考えられている(e.g., Darnon, Dompnier, Gilliéron, & Butera, 2010)。遂行目標における有能さの定義は、標準的な基準を用いること、すなわち、他者の成績を参照し(社会的比較)、その位置づけによって定義されると考えられている(e.g., Darnon et al., 2010)。

しかし、いくつかの先行研究では、習得目標と社会的比較の関連が示されており(Régner, Escribe, & Dupeyrat, 2007; Darnon et al., 2010)、達成目標理論で仮定されている参照基準は、達成目標における有能さの定義次元だけでは規定されない可能性が考えられる。また、並川(2011)や徳岡・前田(2011)においても、継時的比較と社会的比較の間には中程度以上の正相関が示されていることから、継時的比較は習得目標だけでなく遂行目標とも正の関連を示すことが予測される。これまで継時的比較と達成目標の関連は示唆されているが(e.g., Darnon et al., 2010)、その関連を直接検討した研究はない。

そこで、本研究では、達成目標が継時的比較に及ぼす影響を検討する。達成目標は領域固有であるという指摘を踏まえ(Elliot, 1999)、本研究では大学生の英語の授業における達成目標と継時的比較を対象とする。

方 法

対象者 広島県内の大学生に以下の調査を実施し、欠損値のなかった142名(平均年齢19.75歳, $SD = 0.75$; 男性69名, 女性69名, 不明4名)を分析対象とした。

手続き 大学の講義時間に集団実施した。

調査時期 平成23年12月に実施した。

調査内容 (a) **達成目標尺度**: Hulleman et al. (2010) による達成目標の定義に基づき、習得接近目標、習得回避目標、遂行接近目標、遂行回避目標の4つの目標について、各3項目ずつ合計12項目を作成した。回答は、回答者の受講している英語の授業科目の中から授業科目名を1つ、その担当教員名を記述してから、その授業科目を想起しながら回答するように求めた。また、調査は、7段階評定法(1: あてはまらない, 3: 少しあてはまる, 5: まあまああてはまる, 7: とてもあてはまる)により回答を求めた。(b) **学業場面における継時的比較尺度**: 徳岡・前田(2011)により作成された学業場面における継時的比較を測定する19項目を使用した。この尺度は、現在と過去の自分の学習の仕方や、学習態度などの学習過程を比較する自己内学習比較と、現在と過去の学業成績や記憶力などの学業遂行の結果を比較する自己内遂行比較の2因子から構成される。英語を学習する際に過去の自分と今の自分をどの程度比較するか、7段階評定法(1: 比較しない, 3:

少し比較する, 5: まあまあ比較する, 7: よく比較する)により回答を求めた。(c) **テスト成績**: 最も最近受けたTOEIC得点について、200点以下を1, 900点以上を16, その間を50点間隔で区切った選択肢をつくり(e.g., 6: 401~450点)、自己報告させた。

結 果

分析の概要 学業場面における継時的比較2下位尺度をそれぞれ目的変数とし、テスト成績、達成目標を説明変数とする階層的重回帰分析を行った。ステップ1では、テスト成績を共変量として投入した。ステップ2では、4つの達成目標(習得接近目標、習得回避目標、遂行接近目標、遂行回避目標)を投入した。ステップ3では、4つの達成目標のうち2目標間の交互作用項6つ、テスト成績と各達成目標の交互作用項4つ、4つの達成目標のうち2目標とテスト成績の3要因の交互作用項6つ、合計16の変数を投入した。全てのステップで強制投入法を用いた。

重回帰分析の結果 自己内学習比較を目的変数とした階層的重回帰分析の結果、ステップ3におけるモデルは有意であった($F(21, 120) = 6.10, p < .001, R^2 = .43$)。習得接近目標($B = 0.46, F(1, 120) = 30.62, p < .001$)、遂行接近目標($B = 0.40, F(1, 120) = 14.95, p < .001$)が自己内学習比較に正の影響を及ぼすことが明らかとなった。また、交互作用では、遂行接近目標と遂行回避目標の交互作用項($B = -0.31, F(1, 120) = 24.77, p < .001$)、テスト成績と習得接近目標の交互作用項($B = 0.07, F(1, 120) = 5.93, p < .01$)、そしてテスト成績、習得接近目標、遂行接近目標の交互作用項($B = -0.06, F(1, 120) = 4.58, p < .05$)の影響が有意であった。

自己内遂行比較を目的変数とした階層的重回帰分析の結果、ステップ3におけるモデルは有意であった($F(21, 120) = 4.68, p < .001, R^2 = .35$)。習得接近目標($B = 0.36, F(1, 120) = 17.51, p < .001$)、遂行接近目標($B = 0.40, F(1, 120) = 5.45, p < .001$)が自己内遂行比較に正の影響を及ぼすことが明らかとなった。また、交互作用では、遂行接近目標と遂行回避目標の交互作用項($B = -0.17, F(1, 120) = 7.46, p < .01$)、およびテスト成績と習得回避目標の交互作用項($B = 0.08, F(1, 120) = 6.40, p < .05$)の影響が有意であった。

考 察

学習場面における継時的比較の2下位尺度のどちらにおいても、習得接近目標と遂行接近目標の有意な正の主効果が確認された。これまで、達成目標理論の有能さの定義次元では、有能さの向上を目指すことと継時的比較、および有能さの実証を目指すことと社会的比較が、対応する関係にあるとされていた(e.g., Elliot & McGregor, 2001)。Darnon et al. (2010)、Régner et al. (2010)や本研究の結果は、有能さの定義次元における参照基準に基づいて達成目標を分類することで、Hulleman et al. (2010)により指摘された理論と測定との不一致を生じさせる可能性が高いことを示唆する。